2

橋本宗吉（曇斎）の西洋医事集成宝鑑とエレキテルについて

渡部　幹夫
順天堂大学医療看護学部

橋本宗吉（曇斎・鄭・直政・伯敏ともあり）は適塾につながる大坂の蘭学者の祖として高名でありその研究も広くされてきた．生年1762年，没年1836年とされる．昭和10年（1935年）には清浦奎吾を会長として「橋本曇斎先生百年記念会」が大阪と東京での記念講演会開催と新村出の講演放送がされて，先賢としての顕彰が大々的におこなわれた．曇斎の日本の医学史・科学史に果たした功績の多きいことを物語るものといえる．昨夏，アメリカ国サンフランシスコUCSF校医学図書館に収蔵されている和漢籍の調査を行なったが，書誌カード約900枚の中から2枚の橋本による和書のカードを見つけることが出来た．一点はHashimoto, Sokich. tr. 西洋医事集成宝鑑 本草部 橋本宗吉訳 1819 3v. であり，もう一点はHashimoto, Sokich. 西洋医事集成宝鑑目録 橋本宗吉著 1821 Manuscript copyであった．共に橋本の代表的な翻訳書である「西洋医事集成宝鑑」全35巻の一部と考えられる．UCSFの収蔵書は戦後の占領下において収集されたものであり，日本の医学史の中に占める位置が高いと考える．

今回は，明治初期の佐藤英白，江戸末期の伊藤慎蔵や佐久間象山の取り組んだ電気療法に先立って電気の研究をした橋本曇斎のエレキテル研究とその時代についての小論を試みて発表する．橋本についての年譜は橋本曇斎先生百年記念会の資料および中野操「蘭学史話」の中に見られるものに従って記述する．橋本は阿波の国に生まれ父と共に大坂に出て傘屋の紋書きの職人をしていた．28歳（1790年）の時に小石元俊と羽間重富の援助で，江戸の大槻玄沢の門に学び，帰坂後，絲漢堂を開き蘭学の教授と蘭書の繹述をしながら医業を開業した．大坂で最初に蘭学の教育を始めた人とされている．多くの翻訳をしているが，江戸幕府の出版規制の中で写本としてのみ伝わるものも残る．大坂での絲漢堂での盛名の時期の活躍にもかかわらず，晩年の消息には不明なことが多い．その理由は，天満与力の大塩平八郎が摘発した切支丹事件（1827年）で，門人の藤田顕蔵が耶蘇教の書物を多数所有していたことから捕縛・極刑に処されたことにより，橋本を中心とする大坂の蘭学の興隆に一時かげりがみえることになったことが大きいといわれている．同じ時代に，長崎と江戸を往還し大坂にも滞在したシーボルトがオランダへの帰国時にシーボルト事件（1828年）が起こっており，幕府の外交内政政策の影響が大きいと思われる．橋本は蘭学に取り組む以前よりエレキテルを弄ぶと伝わり，ボイスの書を訳した『エレキテル譯説』と，自ら及び門人の窮理実験から著した『阿蘭陀始制エレキテル窮理原』の二書が現在に伝わる．後書は幕府の出版の許可が得られず当時には刊行されていない．エレキテルを阿蘭陀渡来の珍しい見世物の位置から，究理学的な実験の対象としたところに橋本の科学者としての意識があると考えられる．二書の中に見られる図譜は電気概念の不明な時代における観察と実験として興味深い．橋本のエレキテルについての実験の豊富さに比較して，医療への応用には積極的であったとは思われない．二書における記載も外国での施術の紹介にとどまっている．

その後幕末期に電信の技術が日本に紹介されるまでの間，日本のエレキテル研究は，江戸幕府の鎖国禁教政策の継続と，書物・翻訳書の出版管理政策のなかで遅れていった事は否定できない．

本研究は科学研究費補助金「米国国立医学図書館等所蔵の日本古医書の調査・データベースの作成」の一部として行なった．